

ヨモギ

これや見し 昔住みけむ 跡ならむ

蓬が露に 月のかかれる 西行

「これが昔住んだ^{いおり}庵の跡なのか。荒地に一面蓬が生えて、その葉の露に月がキラキラ映っている」。漂泊の旅を続ける西行が、昔の草庵を訪ねたときの幻想的な歌である。

ヨモギは世界各地に分布し、生命力の強い植物である。手入れの行き届かなかった筆者の畑にも勝手に繁茂していたことがある。その生命力に期待して、日本では古来、民間薬として多用されて来たのである。腫れ物、切り傷、打ち身、脱肛、子宮出血、痔出血、血便、風邪、喉の痛み、咳、喘息、腹痛、下痢、食あたりなどに用いられた。また蓬は草餅^{ももち}の餅草としても親しまれている。古伝^{みかさふみ}『三笠記』(『秀真伝』の補完文献)に「三月の初め、桃柳^{みきひなまつ} 御酒雑祭り 蓬餅^{よもぎもち} 民苗代に 種お蒔く」とあるように、桃の節句に蓬餅を食べる風習は驚くほど古い。支那の本草書には「蓬」はなく、止血、調経に預かる「艾葉」として登場する。「艾」はモグサのことである。『名医別録』に真っ先に「百病に灸するを^{つかさど}主る」とあるように、唯一お灸の材料として艾葉は他の植物と一線を画している。

日本には仏教伝来とともに鍼灸治療が伝えられたと言われている。『百人一首』の藤原実方の歌(かくとだに えやは伊吹の さしも草 さしも知らじな 燃ゆる思ひを)や『新古今和歌集』の和泉式部の歌(けふも又 かくや伊吹の さしも草 さらば我のみ 燃えやわたらん)にモグサが登場するが、当時は伊吹山のモグサが上品であるとされていた。モグサの語源は燃え草であると言われている。お灸は庶民の聞にも広く流行し、江戸時代には最盛期を迎えた。

筆者は古代人のツボの発見にはそれほど驚かない。感受性の高い人がツボのエネルギーを聞き分けたとしても不思議ではないからである。耳針療法用の耳針計でも電氣的にツボを特定できる。むしろ何故モグサとして香りのよい蓬を選んだのかが不思議である。

蓬のツボと書く「蓬壺」という言葉をご存じだろうか?後秦時代の『拾遺記』に「三壺、即ち海中の三山なり。一に日く、方壺、即ち方丈なり。二に日く、蓬壺、即ち蓬萊なり。三に日く、瀛壺、即ち瀛州なり」とある。蓬壺とは、東海の仙人の住む三神山の一つである蓬萊山のことであった。その蓬萊山とは、後周の義楚が著した『義楚六帖』「日本国」の項目に「東北千余里に山あり、富士と名づく、亦是蓬萊と名づく。其の山峻、三面は是れ海、一朵上に聳える。頂に火煙あり」とあるように、当時噴煙を上げていた富士山のことである。古伝『秀真伝』では古代富士山は「ハラミ山」と呼ばれていた。この山には「ハオ菜」「ラ葉」「ミ草」という三種類の長寿を約束する薬草が生えていたのでそう称したのである。「ハラミ山」を漢字で当て字すると「蓬萊山」となる。思えば「蓬」も「萊」も草冠で植物を表している。江戸時代の『秀真伝』研究者は「ミ草」を人参に当てはめ、「蓬萊参」と書いて「ハラミ」と読ませている。驚くことに『秀真伝』では、天界と地上を結ぶ重要な祭政上の拠点をツボと見なし、ハラミ山を「蓬壺」、多賀城周辺を「方壺」、近江を「瀛壺」と呼んでいたのであった(なお『秀真伝』には「身柱」のツボのことも書かれている)。

西行は最晩年に富士を詠んでいる。「風になびく 富士の煙の 空に消えて ゆくへも知らぬ わが思ひかな」。西行の時代も富士山は噴煙を上げていた。お灸を据えた「蓬壺」のようにも見える。今度富士山が噴火するのは南海トラフの大地震のときであろうか?それに出会うこともなかりうが、今年筆者も西行の享年と同じ年を迎えた。

(山人)

ㇿ

ㇿ ㇿ ㇿ